

納西族女性の独特な行商精神

黄 琳娜*

ここ数年、納西族の幹部や民衆の間で市場経済のことについて話題になる時、よく聞かれる言葉に次のようなものがある。「我々納西人は頭が悪い、商売なんかできるもんか。」しかし、これは勘違いである。私自身は漢族だが、納西族の村—麗江で育ち、納西人の妻となった。まわりによく付き合っている友達にも納西族の女性が多い。多くの事実から証明しているように、納西族女性の行商能力の素晴らしさは過去のことだけでなく、これからも十分期待できるものである。

一、東巴経の中の一説話「三人の女性の馬売り」が意味するもの物語

納西族の東巴経『挽歌』には、非常におもしろい話がある。麗江玉龍雪山北部の三江口一帯三人の女性（パジメ：納西語の発音）が三匹の馬を飼っていた。彼女たちは毎朝馬に豆を食べさせ、毎晩草をあげた。また綺麗な水で馬を洗い、黄色の櫛で馬の鬣を整え、白い鉄で馬の蹄を修理し、金の鞍、銀の帯、プル（山羊の毛に木綿を少量混入させたもの—訳者註）の敷物をつけ、毎日約四十五分ほど、馬乗りの練習をし、このような生活が三年間続いた。これは麗江大研鎮の四方街へ馬売りへ行くための準備であった。ところが、彼女たちは四方街にやってきた途端、街中の人の群れにびっくりさせられ、馬を売りにたくなかった、その代わりに、馬で四方街と交換したいという奇想天外な思い付きが閃いた。しかし「この四方街は四方とも同じだし、街中はあまりにも賑やかすぎて、運べない」とがっかりし、そのまま家へ帰った。この三人の女性（パジメ）は思い通りにはいかなかったが、麗江にある一番賑やかな「四方街」を買いたいという発想があったとは、なかなか立派な気迫ではないだろうか。

二、歴史上の独特な行商方法

納西族の人々は滇西北地方、海拔2400メートルの高原山区に居住している。険悪な環境に対応する強い耐え忍ぶ精神がなければ、山脈南端を横断するこの地域に独特な歴史文化は生み出されなかっただろう。納西族の女性はこのような厳しい生活環境の中で自立の精神を養い、生業において誰にも代わることのできない重要な役割を果たしてきた。かつて、納西族の女性は社会の変化を観測し、独立心が強く、重要な仕事を担当し、社会地位も高かった。その後、儒教文化の影響で男尊女卑の考え方が生まれた。しかしながら、納西族女性の耐え忍ぶ精神は極めて強く、自立の精神は変わらず養われ続けてきた結果、独特な行商方法が生み出されていった。

*雲南省社会科学院民族学研究所員

(一) “ザンツギョ” (納西族語の発音) — “跑城街” (定期市での商売)

大研鎮 (麗江城) は納西族居住区の政治、経済、文化の中心で、滇西北地区では比較的大きな商業鎮でもある。ここはチベット族地区へ行く時の通過道でもある。清初以来、麗江には貿易活動を行う次の四つの街が形成されていた。

- 1, “グベツ” (納西語の発音) 街。穀物倉庫の下の一本道という意味で、現在の麗江の四方街のこと。“グベ”は大研鎮で、“ツ”は市場の道である。
- 2, “イグツ” (納西語の発音) 街。避難地の一本道という意味、象山の裏側にある。
- 3, “ラサツ” (納西語の発音) 街。山の後ろ側の一本道という意味、黄山哨の近辺にある。
- 4, “ルグツ” (納西語の発音) 街。今の气象台の近辺にある。

この四つの街はいずれも定期市で、初期には農曆の二日、十六日を定期市の日としたが、その後、七日間或いは四日間おきの定期市に変わった。定期市の日には街は非常に賑やかで、店舗の他に露天の屋台もたくさん並んでいる。近辺に住む各民族の人々が定期市へ買い物にやって来る。様々な農産物、家畜、布、紗糸、雑貨日用品、食べ物などが販売されている。中日戦争の時、麗江はチベットとインドへ向かうための交通の要衝となったため、商業活動は更に活気溢れる状況となった。そのため当時、省内外の銀行や店はここで支店をおいていた。麗江に住む人々は少数の金持ちを除き、男性は殆ど出稼ぎにいくか或いは皮靴屋、銅製品屋、銀製品屋、かじ屋などの手工業に従い、師匠について修業する。男たちの中には大研鎮内で仕事する人もいれば、チベット、四川、水里、永寧、雅安、成都、徳欽、維西、芒康などの所へ出かけて商売をしたり、馬幫に雇われる人もいる。当時、交通が不便であったため、男は長い年月、外に出かけたままだった。家には老人、子供と主婦しかいない。そうすると、主婦が家庭の生計を担わなければならない。経済的に貧しい主婦は“ザンツギョ”の小資本金の商売をやり始めた。この商売に必要な資本金は小額だが、利益は大きい。資本金を集めるには、一回“十惠賓”(民間の頼母子講)をやれば、大体十分である。儲けたら、返せばいい。その生計の道具と言え、一つの背負い籠だけだが、納西族女性の独特な強い耐え忍ぶ精神を持たなければならない。なぜなら、この職業はいくら利益があっても、楽な仕事ではない。彼女たちは鶴慶、永勝あたりへ行く時に山産のもの、漢方薬の材料、日用品、雑貨などを運び、帰りに紗糸、布、紙、粉皮(澱粉で作った食品)、赤い砂糖、生姜などを仕入れた。境内の石鼓、九河へ行く時には工業用品、雑貨、日用品などを持っていき、帰りは山産のもの、漢方薬の材料と農副産品(唐辛子、豆鼓など)を買い込んだ。納西族の女性たちは常に何人かグループを組んで、夜明けに出発する。主な旅程は麗江から鶴慶まで約40キロ一、七河まで約30キロ一、石鼓まで約40キロ一、永勝まで約90キロ一、九河まで約40キロ一である。当時細い道しかなかった。彼女らは強盗と野獣に脅えながら暗い道を歩いた。歩いていると常に遠い所から豹、狼の声が聞こえてくる。しかも、往復の道中とも重い荷物を背負わなければならない。麗江から七河、鶴慶などへ行ったら、往復の所要時間は四日間にかかる。しかし、永勝へ行くには七、八日間もかかるから、あまり行かない。彼女たちは夜、馬店で泊まり、食事は自分が作った粍(もち粉や麦粉、玉蜀黍の粉で作った食べもの一)を食べるだけである。道

中の休憩時間いかに粍を食べ、川水を飲み、手間は殆どかけない。身に付ける服も嫁入りの時に衣装を、何回も接いだもので、足には藁靴を履いた。家に戻ったら、薪を割ったり、家事で忙しいし、子供や年寄りの面倒を見なければならない。定期市の日になると、朝早く家へ出て屋台を並べる。商売の方はできれば午前10時から12時の間に売り切れにする。商売のパターンは売買双方が値段を交渉する方式で取引する。掛けで売り買いをすることもある。午後には午前や前日の定期市での帳面の計算をするか、注文のあった冠婚葬祭用の布、紙、白粉皮、紅粉皮などを用意する。商売の信用を保つため、彼女たちは限られた時間で注文の品物を用意しなければならない。彼女たちは高い教育を受けなかったにも拘らず、「身を持つための基本的な道徳」を守っている。お金を稼ぐ以外にも商業道徳とルールを大事にしている。しかも、薄利多売主義を取る。こうした“ザンツギョ”という商売は50年代の初期まで続いてきた。

(二) “ゾホヅキ” (納西族の発音) — “等街賣街” (街で待つ、街で売る)

麗江に行った時、よく年寄りの方から“ゾホヅキ”という昔の職業についての話を聞いたが、一体どういう職業なのか、理解できなかった。その後、何度も聞いて、ようやく分かってきた。“ゾホヅキ”は“ザンツギョ”と同じく小資本の商売だが、“ゾホヅキ”の場合は街の入口で何人が袋、背負い籠、秤などを持って道端に座り込み、農村から定期市にやって来る農婦を待つ。農婦から農業副産物を買ひ、家に持って帰って加工するか或いはそのまま城内で売る。

糧食商売をやっている女性たちは定期市の朝早く、都市の入口で農婦を待つ。早ければ、早いほどいい。農婦との商売が成り立ったら、早めに別な定期市へ商売に行く。彼女たちの商売の鉄則は薄利多売である。又、まず“ラサツ”へ行って、麦、玉蜀黍などを買い、粉にしてから、四日間の定期市で売る婦女もいる。農家から穀物を買う時に10斤の麦としたら、11斤ぐらいの量で負けてもらう、そうしたら1斤あまりの利益がある。納西語でこの職業を“ブンブツ”と言ひ、粉をひいて粉を売るという意味である。私の知り合いの老婦女が言うには、この商売をやっている間は、服は年中粉だらけ、眉さえも真っ白だったという。

(三) “パパタキ” — “做粍賣”

“タ”は作る、“キ”は売るという意味で、“做粍賣”というのは小資本の商売をすることである。“麗江粍鶴慶酒”(麗江の粍、鶴慶の酒は有名である)というように昔から滇西北地方で粍を売るのはほとんど納西族の女性である。粍を売るには、街に店があり、フライパン一つ、大理石製の板一枚、木製の洗面器一つを揃えば始められるが、楽な商売ではない。毎日夜明けに起きて、水を汲み、粉を捏ねる。特に美味しい粍を作るには、粉をよく捏ねるのがポイントである。昔の言い伝えに「老婆打才好、麵は揉才好」(麦は殴るほどがいい、粉は捏ねるほどがいい)というのがあるほど粉はよく捏ねる必要がある。

粍の作り方は二つある。一つは“ハム粍”を鍋に少量の油を入れて焼く。この作りは繊細で、油で焼いても油濃くないが、値段はやや高い。もう一つは庶民的な食べ方で、まず粍を鍋に軽く焼いてから、かまど内の石の上に移し焼く。値段は非常に安くて、一つ何銭かで買えるもので、私は小学校の時によくこの粍を買った。麗江は高原地区にあるため、小麦の生産量が多く、美味

しい粿を作る原料となる。出来上がった粿は何日間も保存できるから、この地方の人々が出かける時に必ず携帯する食べ物である。

四 “ブコブキシカン”（納西族の発音）— “殺猪賣肉の屠戸”

“シカン”（肉屋）は豚を殺してから、肉を処理し、または塩漬けにする。大研鎮の納西族女性の肉屋は肉を処理する腕がいい。これはいつ頃のことか、なぜなのか、歴史的に検討されてきたことはないが、納西族女性の社会的な役割及び彼女たちの苦しみや辛さに対する堪え忍ぶ精神、生活を求める意欲から予想すると、彼女たちは注意深い性質で、男性より商売が上手で、豚を殺すなどの重労働もいつの間に男性にとって代わって行うようになったのだろう。今も納西族の古城には“シカンドュ”—“屠宰巷”（豚を殺す横丁）という地名が残っている。

改革解放以前，“屠宰巷”の女性たちの仕事は辛い、重労働だった。統治階級からはこの職業は卑しいと見られ、この横丁に住む人と結婚したくないほど嫌がられていた。しかしながら、人々の目から見た“シカン”は“スーパーウマン”であり、誰も彼女たちをからかったりしない。

改革解放後、麗江の人口は急速に増加し、人々の生活レベルも向上した。一か所の“屠宰巷”だけではもはや市場の発展や取引の需要に応じられない状態となった。更に現在“屠宰巷”の納西族女性たちは他の食品会社に勤めたり別な職業を求めるようになる。それでも、納西族女性が屠殺技術と商売の巧みには麗江の経済発展に大きな役割を果たしてきたと言える。現在、麗江古城大研鎮の肉屋は今なお一部の女性によって経営されている。現在農村の屠殺仕事は男性がやっているが、市場で肉を販売する時は今なお“屠宰巷”の納西族女性に頼むことが多い。彼女たちは肉を切る手際がよく、商売の仕方も上手だそうだ。

一度麗江の肉屋で買い物をしようとした時，“シカン”のおばさんは笑顔で「お姉さん、今日は土曜日だから、実家へ帰るんでしょ。この骨付きの肉は一番美味しいのよ」と言いながら、私が答える間もなく肉を切って、秤の上に乗せ、笑顔で言った。「丁度、5斤だ。1斤は4.5元だから、全部で22.5元。お姉さんは今日の最初のお客さんだから、0.5元お負けするよ」。負けてくれたし、せっかくなので、仕方がなく、お金を払って帰ったという経験がある。

五 “ヅギグラベ”（納西族の発音）— “外出経商”

“ヅギ”は遠い所へ出かけの意味で、“グラベ”は行商の意味である。普通遠い所へ出かけ、行商するのは納西族の男性だったが、地区によって納西族の女性も男顔負けの働きを見せた。

麗江東河村では解放前に330戸余りの家があった。この村は皮匠で有名な村で、村人たちは男も女も誰でも革靴が作れ、一日の生産量は平均500足以上あった。だが、村人はだんだん村を離れ、他所で革靴の商売をするようになった。昔、寧浪、永寧には皮靴街があり、これは麗江東河村の人が興したという。30年代の周汝誠氏の調査によれば「この村の仕事は男も女も革靴作りである」といい、毎年約二万足を生産したという。隣の四川省各県の人々も革靴を注文するためにわざわざやって来た。この村の納西族女性たちは麗江地方の納西語を話せるだけでなく、地元の摩梭語、四川の漢語も話せ、商売上手だった。わが家の親戚の中にも当時寧浪、永寧へ出かけ革靴の商いをして定住した女性がいる。1984年、私の夫が出張した時に彼女を訪ねたことがあった。彼

女は何年前に亡くなった。

徳欽にも大勢の納西族女性が集まる所がある。毎年、四川、チベットから太子雪山に詣でるチベット族の人々は荒物や漢方薬の材料などを持ってきた。納西族の女性たちは彼らと物々交換をする。そのやり方は左手でチベット族が握っている荒物を取り、右手で日用品や食べ物を追加する。双方とも合意したら、手を放し、取引が成立する。

故郷を離れ、行商で成功した例に、楊丹桂さんという女性がいる。彼女の父親は楊守其といい、麗江県大研鎮出身の納西族で、行商するため、インドネシアへ渡った。楊丹桂さんはインドネシアで生まれ育った。少年の時に一度故郷の麗江に戻って、教育を受けたが、まもなく、再びインドネシアへ戻った。その後、父親の資産は社会歴史の変動とともに倒産に瀕し、彼女は若くして夫を亡くし、幼い子供たちを養っていかなければならなくなった。彼女は自分の力で香港で「北京絨毯会社」を創立した。その後、アメリカへ移民したが、楊さんは親族に会うため、何度も故郷の麗江に帰省した。彼女は納西文化を愛し、納西文化を研究し、アメリカで納西文化を宣伝している、更に雲南大学に「楊丹桂奨学金」を設立し、文科専攻の納西族学生の支えとなっている。私は何度か楊さんと話したことがある。楊さんとの話していると納西族の人々の自分の民族と故郷を愛する情熱、絶えず向上しようという意欲を感じさせられた。

三、期待できる納西族女性の新世代

統計の数字から分かるように、納西族女性の素質は他の民族と比べ比較的高い。15才以上の成人女性は9.5万人おり、識字率は61%にのぼる。この割合は人口数の少ない満族、モンゴル族に次ぎ、漢民族の女性（53%）よりも高い。そのうち高等教育（大学、専門学校）を受けた者は3290人いる。職業は第二次、第三次産業に従事している人が比較的多い。そのうちサービス業で勤務する人は3262人にのぼり、納西族の男性（3687人）よりも高い。これは他の民族ではあまり見られない現象である。今年（1995年）の3月に私は麗江に何日間か滞在した時、いくつかの業種で新しい現象を目にすることができた。

まず麗江古城に“洋人街”ができた。この“洋人街”は玉河橋から阿湓礫石橋あたりまで続き、観光客を迎えるための軽食店、コーヒショップ、工芸品店などおよそ20間もある。これらの店の経営者はほとんど納西族の女性である。有名なレストランもできたようだ。どこそこの店はタイ人とカナタ人に人気だというような話も耳にした。

もう一つは女性のタクシー運転手が多いことである。正龍タクシー会社のマネジャー楊四龍さんの話によると、麗江のタクシーの総数は約267台。この数は地区、自治州、県、市の中でも最も多い。運転手の総数の40%は女性である。以前、麗江の街にはたくさんの女性バイク運転手がいた。これらの女性バイク運転手はほとんど拉市、白沙などの村の出身であった。現在、彼女たちはバイクをタクシーに換え、タクシーの運転手となった。ちなみにタクシーの運賃は非常に安く、古城内を一周をしても、たったの3～5元である。

最後にもう一つ、文化芸術公演団のことを紹介しよう。この団体の出演者はもともと海民族

村のグループに属していた、そのうち四人の納西族女性と一人の男性が自らグループを組み、独立した。彼らはよく京津唐（山）地区、両広（広東、広西）などの地へ公演へ行く。時々、わが家に遊びにくるが、彼らの自信を満ちた笑い声を聞くと、新人類のバイタリティをしみじみ感じ、希望が湧いてくる。

ところで、納西族の女性たちの大多数は様々な社会的、歴史的要因により外界の接する機会が少ないことは確かである。彼女たちも今後麗江の外へ向かって、もっと広い視野でものを見ていかなければならなくなるだろう。例えば、カナダの友人の援助で「国際工業合作総社」組織が生まれたように麗江の旅行業の発展と海外からの援助において麗江の納西族女性が活躍できるチャンスに更に恵まれることを私は願っている。

（翻訳者 蘇 素卿）

新刊紹介

郭大烈・和志武著 『納西族史』

本書は両者が、10数年間を費やし、編みあげた、納西族史研究の決定版ともいべき労作である。納西族史を記述するにあたり、冒頭で五つの方法（または抱負）が述べられているが、興味深いのは、最初に掲げられている「民族自我意識と整体観的統一」という認識である。ここでいう「民族自我意識」とは、歴史学者としての著者自身の書く行為に向けられたものである。著者は二人とも納西族出身であり、この大著がまさしく彼等の「民族自我意識」の表出であることを隠そうとしない。といっても、高揚に満ちた文体はほとんど見られず、本書全体は豊富な史料を駆使し、冷静な視線で記述されている。というのも、一方で、「整体観」、即ち、「中華民族」の歴史の一部として有機的に関連し合っているという点を重視しているからである。偏狭な納西族ナショナリズムに陥るのではなく、「中華民族」ナショナリズムに囚われるのではなく、(著者の)「民族自我意識」と「整体観」の間で葛藤する意識の運動の中で、『納西族史』は表出されたといえようか。

本書の構成は以下のようになっている。第一章 導論、第二章 納西族古老の社会形態和民族淵源、第三章 秦漢至唐宋時期納西族の歴史發展、第四章 古代納西族の經濟生産和社会生活、第五章 元代納西族社会与土司制度的建立、第六章 明代麗江木氏土司、第七章 清代麗江の改土帰流和納西族社会的發展、第八章 明清以来滇川納西族地区其他土司狀況、第九章 近現代納西族地区社会的發展

一章から八章までは郭大烈氏が基本的に担当し、九章及び四章・七章中の東巴教の内容に関連した部分は、和志武氏が担当している。

具体的な内容について、ここで言及する余裕はないが、元代以降の記述が約三分の二を占めており、その中でも、「土司」関係の記載が豊富であることは、一つの特色といえるだろう。このことは、「土司」関係の論稿が多い郭大烈氏の本領が十分に発揮されているともいえ、また筆者が最も関心を持って読んだ箇所でもある。というのも、「土司」にまつわる事柄は、納西族史において重要なばかりではなく、現在も伝承されている民俗の中にも残存しており、ナシ族の民俗文化を解釈する一つの鍵ともなっているからである。麗江のサンド「説話」をはじめ、中甸や永寧等の広範囲の地域に亘って、木氏にまつわる伝承は、「説話」や儀礼の祭文中に痕跡を残しており、こうした伝承を歴史的出来事の中に置く作業に関心を抱いている者にとっても、本書は心強い援軍となってくれるに違いない。

尚、執筆者の一人である和志武氏は1994年12月18日に永逝されている。雲南に留学中に、東巴經典の講義を受けたことがこんなに早く貴重な体験になるとは思いもよらなかった。その講義で、東巴經典の言語研究の重要性を力説していたのが偲ばれる。氏の經典言語の造詣の深さに敬服しつつ、この場で、心からご冥福を祈らせて頂きたい。

（荒屋 豊）

A4版 四川民族出版社 1994年8月刊 22.8元